

行動力を持った女性たちのバイタリティーに驚かされる。

この他、旅日記を書いた女性として藤木いちがいる。元禄一三年（一七〇〇）師走、一四歳のいちが住み慣れた京都を発って嫁き先の筑後久留米藩家老の岸家へ向かったが、瀬戸内海の船の中で新年を迎えた事や道中の地域の風習など少女の目に映ったままを『庚辰日記』に綴っている。

豊前小倉藩の家臣の妻小笠原いせ子は、夫の長年の勤務替えにより天明六年（一七八六）、江戸より小倉へ移り住むことになり、家族と共に小倉へ向い、その地で七年間を過ごすことになる。その間、夫長年に先立たれ、異国の船は小倉の近海に迫り、何かと異郷の地で心細い生活をする。寛政六年（一七九四）、成長した息子が江戸の屋敷へ家族を迎えることとなり、いせ子は太宰府へのお礼詣でなども済ませて江戸へ向い、江戸に住む親族に出迎えられるが、その七年間の長い記録『幾佐良喜の日記』を遺している。

文久二年（一八六二）、幕府は参勤交代制をゆるめ、妻子帰国の禁制を解いたが、これによって江戸に滞在していた大名の妻子たちは続々と帰国した。筑後久留米藩一〇代藩主有馬頼永夫人晴雲院は、文久三年（一八六三）、一八年振りに亡き頼永の墓参のために久留米へ向かい、その折りの紀行文『春の山道』を書き留めている。

豊前小倉の歌人佐久間種の妻立枝子は、馬関の妻家広江

家にいる頃は広江松琴という名の閨秀画家としても知られていた。天保十一年（一八四〇）、立枝子二七歳の時、二度目の婚家を出て歌の師種のもとに走ってからは、種と共に各地を旅した。その後、あちこちと転住し、次々と子供が生まれたこともあって、生活は苦しくなり、旅へ出て家を空けることの多い種に代わって、立枝子は塾を開いて生活を支えた。種や子供を遺して四八歳で世を去った立枝子の遺稿集『呉機』には、その折々の歌や文章などが収められているが、それらは人生の旅日記とも言えるものである。

幕末の勤王女流歌人・福岡藩士の妻野村望東尼はあまりにも有名である。伝記も何冊か刊行され、多くの人々に語られているので、ここでは望東尼の遺稿だけを列記しよう。歌集『向陵集』日記『木葉日記』『上京日記』『夢かぞへ』『防洲日記』

参考資料

『福岡県史』近世研究編福岡藩（三） 西日本文化協会 昭和六三年
『福岡女学院短期大学紀要』に発表された前田淑論文
『伊藤常足門下の女流とその作品』紀要第一号 昭和四〇年
『近世女流漢詩人立花玉蘭』紀要第四号 昭和四三年
『女流文人秋枝家子とその周辺』紀要第九号 昭和四七年
『近世女流歌人佐久間立枝子』紀要第一号 昭和五〇年
『女流文人龜井少栗小伝』紀要第一号 昭和五五年
『少栗小傳』『竊窺稿』をめぐって 紀要第一七号 昭和五六年
『野村望東尼自筆本『木葉日記』』 紀要第一八号 昭和五七年
村上秀代『佐久間立枝子』（『小倉郷土史』二巻 昭和三二年）
倉富一『晴雲院夫人の歌日記』（『郷土研究筑後』第四巻第六号）他

女の史料（二）

大坂屋治右衛門母豊女の『善光寺道中日記』

史料について

山形藩秋元家の藩士の妻、山田音羽子が著した「お国替絵巻」の学習が一段落したところで、私たちの「知る史の会」のグループは、彼女の道中記のコースをたどるべく、昨年（一九九〇年）七月、山形まで出掛けた。その折「お国替絵巻」に度々登場する「大坂屋」の子孫にお会いできる幸運に恵まれ、同家において、心暖まる茶菓の接待を受けた際、「我家にもこのような」と、一三代目青山治右衛門氏が提示されたのが、この史料である。

江戸時代の女たちの旅日記については、柴桂子氏の「旅日記から見た近世女性の一考察（江戸時代の女たち／吉川弘文館）」に詳しく、同氏の旅日記の目的別分類によると、一三三件中、最も多いのが、六六件の「神社仏閣参詣及び物見遊山の旅」であり、今回の史料は、これに追加できよう。羽州山形十日町で「葉種・細物・紙類」を扱う商家の女性、青山豊女が、本史料の著者であるが、同家の過去帳によると、九代目治右衛門の妻として寒河江の渡辺家より嫁ぎ、

杉本恵子

明治一〇年（一八七八年）九月一〇日に七七才にて没（戒名は良運院徳誉榮寿法忍大姉）と、なっている。従って道中日記が書かれた文久二年（一八六一）は、六〇才の時、ということになる。

和紙横半帳一九帖に、三月二八日の出立から、六月一日新潟泊りまで、約二カ月半の道中日記が、力強い筆勢で、達筆に書かれている。私にとっては、初体験の古文書解読であったが、すでに音羽子道中記で馴染みになっていた地名が続出していたこと、それに漢字が豊富に使われていたことで、推理小説の謎解きに似た楽しさを味わいつつ、読み進めた。金品の授受がしっかり書き付けられ、各地の道程に詳しく、かなり数字に強い女性であることが窺え、「女不通」の関所では案内銭を出して脇道を行くのであるが、関所によって案内銭の値段が異なることに對して訝っていることや、巻末に、金銭出納の覚書があり、商家の女性らしい記録として、興味深く思った。

（史料は一部、解説文は全部）

(表紙)

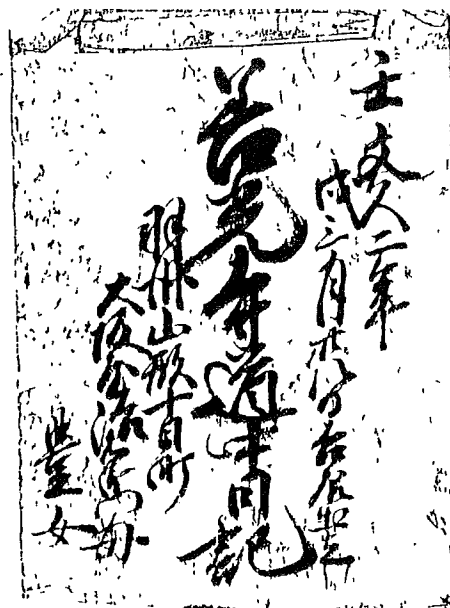
壬文久二年

戊三月廿八日吉辰出立

善光寺道中日記

羽州山形十日町
大坂屋治右衛門母

豊女



三月廿八日吉辰
出立の如きは
行幸地村乳母宅にて茶のみ
休 わらんじ五足もらい馬士
便り手紙差出申候

(本文)

三月廿八日吉辰

目出度出立天気よし

片谷地村乳母宅にて茶のみ

休 わらんじ五足もらい馬士

便り手紙差出申候

、上の山江 三り

新瀨瀬右衛門泊り足利や

おまき様金巻朱銭別

八日町角若松や持参二付

同人へ手紙差遣申候 夫より

廿九日天気よし

、榎下江 三り

上の山之先乳懷ト申所

あめ茶や二休居候所江戸や

喜兵衛どのに逢 わた入日傘

頼み返し申候 上の山を判取

ならけ御番所へ納 日干

金山通り出羽奥州之境

峠二不動堂御立なり

よろし

、湯の原江 三り

此所二而判取上戸沢へ上ル

峠田越後や泊り

卅日曇り小雨ふり

、なめ川江 一り半

、セキ江 一り半

此所仙台角田領

、渡瀬江 二り

此所二而八はいとふふの
吸ものそふめんのやうに

きり古今珍敷上手也

下道材木岩へ廻り

、下戸沢江 一り半

、上戸沢江 一り

此先峠あり 小坂峠といふ

不動尊あり 下を見れば

あぶくま川見へ誠に景色

、小坂村江 一り半

此宿丸や泊り石之風呂二

初メ而入

四月朔日天気よし 下半田

村知祐尼之庵二立寄土産

として二百文差出し茶いたゞき

珍敷かきもらひ出立

四月二日天気よし

、幸折江 一り半

無能寺様へ参詣仕度候得ハ

同所田沢屋江わらんじぬき

土産として沓朱差上ル 否哉

無能寺様江参り金二百疋回向料

沓朱は土産沓朱は御沙弥様

方へ外二式朱也渡辺吉次

先祖代々二而上ル 和上様へ

御目二掛り御座敷二而ゆるく

御茶被下誠二珍敷大かき

被下其上色々御咄有之京都

二而六十二才之女之ウテヨリ大日

如来南無阿弥陀佛之御名号

毎月廿一日ニ写し候よし 誠二

難有御事二御座候 極細写二而

相訳り兼天眼鏡二而少し

相訳り申候 尚又黄金拝見

仕候 是は芝大僧正様

公儀式枚御貫ひ被成候

夫ヲ当和上様へ沓枚御貫ひ

被成候よし御咄し御座候 此日折

能餅搗二而四人とも御馳走二

相成申候 旁手間取御座候 無

抛田澤やへ一宿いたし禮

として沓歩差出候所中々

請不申無利二被返候間追而

礼可致心得二而出立仕候

無能寺様大かき廿八ツ

練やうかん式本塩かま沓本

もらひ又油や和吉殿江

手拭一筋持参二而鳥屋

由兵衛寄候所練やうかん

四本もらひ申候 右いづれも
福しま京や出し二而差下し申候
四月二日天気よし
瀬ノ上江

、福しま江
此所にて京やへ紙包式ツ出し
下候

、八丁能目江
此日風はけしく殊二而道
かたく何分尺取不申無抛
同所河又や泊り
四月三日天気よし

、二本松江 二り半
片谷地村乳母は領之由也
善性寺様へ参詣夫より
杉田村楽師様へ参詣
本宮之入口西国三十三所
観音様へ参詣山二而誠に
景色よろし 夫より少し

四月八日天気よし今市
出立日光迄二り鉢石町紙や
半兵衛泊り 昼四つ時着御宮
参詣 此山は不及申行て
拜申へし 翌九日朝飯後又々
参詣御宮中拝見下向四つ時
出立 天気よし 今市迄二り
板橋へ二り文挟江一りメ五り二而
此宿きくや乙八泊り
四月十日雨にて日光は此海道
例幣使海道ト申並杉二而
極宣敷道也 鹿沼へ二り八丁
上宿也 此所出口も八丁計参り
出流岩船街道二而横道也
粟野之宿迄三りいつる迄三り
山二つ越し岩本や惣衛泊り
翌日此所三山掛ケ男八百六十八人
女八十八人宛 此御山は弘法大師
禪定の岩やト申女ハ参る事
ならず 神社佛閣夫々拝見いたし
誠ニ難有事紙筆ニ難申尽
十一日天気よし 此所出立一り程

参り安達太郎大明神
ト申御宮江参詣此御宮
餘程訳有結構なる御宮なり

、本宮江
此宿大野や泊り
四月四日天気よし 本宮
出立浅香郡江差掛り少々小高キ
所浅香之名松有之 仙台様御
通りの節御立寄被成候 日和田村
に蛇骨地藏尊と御立あり 其処へ
松浦佐代姫之御堂あり 郡山
繁花之町 須賀川右同断 入口に
鎌足公之御宮あり 弁天茶や
式軒あり見事く 須賀川へ
矢吹迄二り半並松二而至極
宣敷道也 矢吹あけぼの
改住の井宿泊り 本陣二而随分大家也
四月五日矢吹出立 雨天風二而
相の宿新田村大和久村白川
郡御代官清水孫次郎様
支配所ふませ村大田川村

行小野寺村云有 小野小町之墓
有 八幡宮一夜二出来候御宮
あり 御神木ひぬき中頃より
杉一本生出し誠ニ不思議之事
いろくあり葛生村云所あり
宿やも随分見事也 岩船迄
三り行く内二峠あり 山ノ真中ニ
茶や一軒有 此所二二本杉地藏尊
御宮あり 岩船福田や泊り
此所岩船地藏尊開帳三分三三三三
出立難有見事く
四月十二日天気よし 藤国迄
三り古河へ二り 此所土井様
御城下本海道也 中田くり橋
御番所御届ケ罷通る 桑手
の宿かねや利兵衛泊り
十三日天気よし此日上野宮様
日光へ御通り拝見 日光祭礼
奉行柳沢様三浦様御通り
拝見 杉戸かすがへ大沢
越谷草加宿味噌や仁兵衛
泊り上宿也

小田川村是より白川領
城下いつみ田村根田村白坂
奥州下野境明神へ参詣
漸々芦野宿丸や与右衛門泊り
此所芦野采女介様御領分
三千十六石也

四月六日天気二而芦野出立
鍋掛越堀の間二而飛脚喜代
松殿二逢 大田原の町出口へ
日光道中二成 大田原へ沢
村江二り 此間なすのが原之内
家一軒もなし 心さひしき所
夫より矢板江一り 此所も野
坂斗矢板富や常右衛門泊り
四月七日天気よし 矢板出立
玉生村船生村此間きぬ川
船渡し大渡り村今市此町ハ
繁花之町二而傘や金兵衛泊り
矢板より八里半野道坂道二而
つゝじしとみの花さかり
横道には候得とも随分景色
よろしき所

四月十四日天気よし 浅草
観音様へ参り昼時小綱町
式丁目しまや藤兵衛宅ニ
着仕候 諸々見物いたし候
四月二十二日出立 川崎宿さか
みや十兵衛泊り 横浜見物いたし
色々唐船毛唐人とも
一見衆くしやく半令外
渡りもののおほくあり
江戸逗留の間く風呂敷二ツ
貰ひひし藤やうかう一箱貰
ひ此品高宮若旦那へ上ル 同
人々たはこ一箱貰ひ申候
廿三日
戸塚の宿中村治兵衛泊り
是より鎌倉へ廻り神社
銘参詣いたしえのしま
山を掛り参詣見事く
同所橋や武兵衛泊り
藤沢遊行寺へ参詣
廿四日金沢八景見物
是は殊によし見事く

廿五日金沢東や泊り
廿六日金沢出立五里の場
大津迄船二而六勿遣候 夫より
浦賀湊一見葉山宿
大文字や泊り
廿七日戸塚宿中村治兵衛
廿八日品川大師川原
村田屋傳右衛門泊り
廿九日泉岳寺参詣
小網町二丁目しま藤宅
着 夫より諸々見物いたし
阿部孫市様案内にて亀井戸
天神様参詣 夫より
船にて小網町迄戻り 晦日
五月朔日二日三日出立
中仙道通り
板橋へ二り戸田川渡し有
ワらひ迄二り八丁
浦和迄一り半
○此所山口清三郎泊り
五月四日浦和出立いたし五月五日
大宮迄一り十丁

此宿出口の相の宿土手宿 夫より
大城村北原入口茶や二而
丁字や和兵衛と申
平井ます女房傘渡世もいたし
五月四日
朝四つ時少し不快二而大難儀仕
此日は此所へ逗留薬用仕候
翌日節句右同断六日七日
八日土手宿村戸田主水様療治
九日少し宣敷相見えおこう殿平治殿
兩人成田山参詣 十日十一日十二日
十三日帰宅 十四日十五日朝四つ時地震
有之逗留中大宮宿稻荷台
薬湯に三人二而参り二階造り座敷
見事に御座候 漸十六日此所出立二而
二両巻分諸掛世話料にも差遣申候
戸田氏巻分薬礼此外逗留中
小遣あり
大宮より上尾へ二り八丁
○桶川へ巷里 栗原権右エ門泊り
十六日天気よし
十七日天気少し曇り 此間にて十一や

吉の助殿江戸登の由出逢
鴻巣へ二り
熊谷へ四り八丁松坂や吉右衛門泊り
此所熊谷寺塔なく御朱印三拾石也
十八日雨天にて逗留仕候
十九日天気よし
深谷へ二り廿七丁
此所岡部六弥太古跡あり
本庄へ二り廿九丁
此宿と左の方妙義山道
藤岡へ三り 宿柏や四郎右衛門泊り
廿日天気よし
吉井へ二り半
富岡へ二り半
此所上州一の宮へ参詣
菅原村へ三り 宿大和や忠右衛門泊り
此所天満宮七才迄
御入国の所也 依て童子天神
御宮あり 色々縁記も有之
廿一日天気よし
中の嶽へ一り余
此御山へ参詣是も縁記二有之

妙義山へ一り十丁
此御山も右同断
是より中仙道松枝へ出ル
椿名山道也
秋間三軒茶やへ二り
宿藤や惣兵衛泊り
此辺いつれも山中二而米百文に
四合五勺
此所椿名山へ四り半
是も縁記等別紙有之
此山と長藤と申宿迄三り
随分難渋の時也 長藤は家
四五軒有之山中喰物二困入申候
宿助右衛門泊り
廿二日天気よし
大戸御関所へ一里
此所女通不申
須賀尾へ三り
長野へ三り峠あり
草津温泉へ二り
宿大瀧下黒岩仲右衛門泊り
廿三日

廿四日 此三日逗留仕候
廿五日
右の所家数三百軒斗有之
湯之出口四十間に十八間之場所
八方へとよ二而通し惣湯敷四十程
色々名有之座敷は二階
造り三階造四階造迄有之誠ニ
繁花の町也都而米青もの二
至ル迄信州辺を参り高直ニ
御座候 何一つ不足なし温泉縁記
は別紙にあり 薬師堂あり
宿やの内にも六七軒大家有
山本十右衛門湯本平兵衛同七兵衛
同角右衛門同安兵衛坂上治右衛門宮崎
文右衛門黒岩仲右衛門杯いつれも極上々
之宿や也 六間梁二十七八門之居室
屋敷三ヶ所も有之外にも数多
宿や有 料理や仕出しや揚弓
見せかし本や何も不足なし
只こまるものは小◎斗に御座候
廿四のヨリ札に御座候
此所善光寺迄十四りあり

廿六日天気
七り洪峠是も極難渋也
三り登り四り下り洪湯温泉
あり宿大湯治菱や寅蔵泊り 此所
も随分宣敷湯治場也是
湯田中はも湯治場也 中野浅野
神代荒町善光寺迄七り
ふじや平右衛門泊り 廿七日天気
廿八日少し雨 廿九日町家三千軒
宿坊四十五軒千石御朱印
御堂間口十五間奥行廿九間三尺
此所江戸へ五十式り京へ九十六り
伊勢へ九十六里日光へ六十五り加賀へ
六十り新かたへ五十式り高田へ
十六り上田へ十り松代へ三り
六月朔日天気よし善光寺出立
あら町へ一り牟礼へ二里半柏原
へ二り野尻へ一り半此所
脇本陣宿石田沢右衛門泊り
六月二日大雨関川迄一り
此宿入口に御関所有之女
不通依而野尻明七ツ時出立

案内銭三十六文宛いたし脇道
通る也 高田迄八り半茶町
三國や泊り 六月三日天気曇り
五智如来へ二り今町へ半り
渡し場あり十六文宛 黒井へ寄り
湯町へ二りかきさきへ二り椿や
孫四郎泊り 六月四日大雨はつ
さきへ二り此出口へ御関所有
女不通案内銭百文宛出候
此所案内せん何ほと申し定めなし
くじらなみへ三り柏崎へ一り
此宿みますや伝兵衛泊り上宿也
六月五日天気 宮川へ三里しいや
へ寄り石津へ二里出雲崎へ一り
此宿角茶やへ泊り 六月六日
山田へ一り半
寺泊りへ二り半弘智法印
入定の所へ廻り峠有弥彦
へ三り明神の社参詣 此宿茶やへ泊り
六月七日天気曇り三條へ四り東西御坊
参詣当宿わこや泊り
八日雨天三條へ五り半行

下茶やへ泊り 九日天気 四り半
新潟三ノ丁能登や八郎右衛門泊り
十日天気逗留

覚

、
□兩〇朱也江戸表にて相渡し
出 壹分二朱也無能寺様
出 壹朱也 田沢や礼
出 壹朱也 道中さいせん見当
出 二朱也 足袋三足
出 二百四十八文 そふり二足
入 壹分 田沢や礼預り
出 壹分 小石川林瑞様
出 三兩二分 □□□□
同 金壹分 平治殿
出 壹歩三朱也 川崎にて珠数代はり銭
五月一日
入金壹分 江戸にて男帯代にかり
□金貳分三朱のこり

道中記終
此帳別紙相改申候間入用
無之候依而如件

上は湯屋より川崎へ
入りて 舟に乗り
有金五匁のこり

文庫・史料館巡り (二)

無窮会図書館

柴 桂子

東京の新宿駅から小田急電車で四〇分あまりの玉川学園で下車し、小田原方向へ線路に沿って五分ほど歩くと、右手の雑木林に囲まれた小高い丘の上に図書館が見える。辺りほとんど開き、雑木林も少なくなっているが、図書館の周りだけが二〇数年前の閑静な住宅地の面影を残している。急な階段を二、三〇段上った所が玄関である。右手に「東洋文化研究所」、左手に「財団法人無窮会」・「無窮会図書館」の看板が掲げられてある。

無窮会は大正四年(一九一五)に発足し、昭和四一年(一九六六)までは新宿区大久保にあった。

《会の目的及び事業》

一、必要な制度・文物の攻究・調査・編集・著訳。

一、付属神習文庫を経営し、博く和漢圖書を蒐集して前号の用途に供する。

一、東洋文化研究所を経営し、前条の目的遂行に志ある者を養成する。

一、東洋文化に関する雑誌及び冊子の刊行・頒布。

一、「無窮会図書館」の維持経営。

一、その他目的を達成するために必要な事業。

図書館は明治期の神道・国学の大家井上頼図博士の旧蔵書三万五千余冊を購入して始まり、井上家の斎号であった「神習舎」から取られた神習文庫をはじめ眞軒文庫・織田文庫・平沼文庫その他多くの文庫が有り、所蔵圖書の総数は二五・六万冊にも達する。内容は神道・国学・国史・民俗学・国文学・国語・漢学などがあり、東洋学の全領域に及ぶ貴重な資料のコレクションは、研究者たちの訪問意欲をかきたてるものである。

江戸期の女性史料としては次の様なものがある。

賢章院殿遺芳録	本多辰次郎	刊
現存貞婦染行状	日尾くに子	刊
西周夫人升子百世草		刊
野村望東尼臨終記	望東尼孫	自刊
緑珠遺草	稲村いせ子	写
西川柏子遺稿集		刊
秩父すむらいの記	岩下磯子	刊
伊香保湯記	稲垣信濃守妻	刊
萩のしづく	中島歌子	刊
まつ露	鍋島健子	刊
葵の舎集	小原燕子	刊
一字庵菊舎尼遺稿	本莊熊次郎	刊
心つくし	税所敦子	刊
唐錦	大高坡伊佐子	刊
和歌女郎花物語	藤原大武	刊
和解女四書	若江薫子	刊
その他、女今川、女教草、女重宝記大成などの女訓書がある。		

年二回会誌「東洋文化」が発行され、全会員に配布されている。